

意富比神社の沿革

「意富比」の語義

意富比（おほ・おひ）神社は、船橋大神宮の名で知られる船橋地方最古最大の神社である。初出の文献は平安中期の『日本三代実録』貞観5年（863）の記事で、「下総国意富比神」とある。これは船橋市域に関する文献としても最古のものである。また平安中期の格式ある神社を記した『延喜式』（えんぎしき）の「神名帳」（じみょうちょう）にも、下総国11社の中に「意富比神社」として載せられ、東国では数少ない「式内社」（しきないしゃ・しきないしゃ）であった。

この意富比の語義と神格について古くは、「大炊」で食物神とする説があり、戦後は古代豪族オホ氏の氏神とする説などが出された。その後、意富比の古い読みは「おほひ」であり、上代特殊仮名遣いの上から「日」は「比」等で表され、「火」は「肥」等で表される点を考慮し、さらに歴史的にみても意富比神社が古くから太陽信仰と深い関連をもっていたことを考察に加えて、意富比神は「大日神」すなわち「偉大な太陽神」が原義であるとする説（三橋健「意富比神考」）が登場する。つまり、中世から幕末までは一般に「船橋神明」と称され、主祭神を天照大神（あまてらすおほみかみ）とする意富比神社も、原初は古代のこの地方最大の太陽神であったとするもので、現時点では最有力であろう。

伊勢神宮との関係

前記のように、当社は中世以降一般には船橋神明と呼ばれることが多かった。神明とは伊勢神宮を分祀した神社のことである。

すると、古代には当地方最有力の太陽神であった意富比神が、中世のある時期に伊勢神宮に同化したと想定されるが、そのあらすじは次のように想定される。— 平安末期に近い保延4年（1138）に夏見を中心とする一帯が、伊勢神宮の荘園「夏見御厨（みくひ）」となった。実際には当地から伊勢内宮へ白布を貢納した。そうした関係から、当地には伊勢神宮が分祀され「神明社」ができたが、その祭神は言うまでもなく最高の太陽神である天照大神であった。やがて地元の偉大な太陽神は、同じ太陽神である神明社に同化して船橋神明となり、船橋大神宮と称されるようになった。—

「船橋殿」は誰か

多古町顯実寺の古文書に、応永4年（1397）の「日尊讓状」という所領の譲渡証文があり、文中に「船橋殿」という文言が見える。この船橋殿については未詳であるが、時代が下った天正6年（1578）の「高城胤辰禁制」（「舟橋文書」）にも「船橋殿」が見え、これは意富比神社神主富氏をさしている。すると前者も神主をさしている可能性が高いと思われ、意富比神社の神主は室町初期には、小規模ながら在地領主としての一面を有していたと想定される。

江戸時代以後の変遷

近世に入ると、江戸に移った徳川家康は翌年（天正19・1591）に領地内の有力寺社に寺社領の寄進をし、船橋神明にも50石の土地を寄進した。裕福な農家5軒分ほどの耕地である。

以後、幕末まで当社は將軍家とのつながりを持ち、本殿の右側に家康・秀忠等を祭る常磐神社が建てられた。また江戸中期以降は「関東一之宮」を自称したため、伊勢神宮と紛議になったこともある。

いずれにせよ、江戸時代には船橋地方随一の名所であり、遊山の旅人はたいてい参詣した。

ところが、明治直前の慶応4年（1868）閏4月に戊辰戦争の局地戦が房総で起こった際、当社が幕府方脱走兵の一拠点とされたため、官軍方の砲撃で焼失するという災難にあってしまった。

明治に入り、当初は仮社殿であったが、間もなく正式に再建された。また、明治初期に新政府の政策として、全国の神社の社格が決められた時、当社は現市域唯一の「県社」とされた（ふつう村の鎮守は「村社」であった）。

文化財と行事

境内の灯明台は明治13年（1880）に完成した和洋折衷の建物で、現存の中では国内最大級の民間灯台といわれ、千葉県指定有形民俗文化財である。

祭礼は10月19・20日に行われ、特に奉納の素人相撲（20日）は「船橋のけんか相撲」として、関東一円に名を知られていた。

また、例大祭（10月20日）をはじめ、正月三が日・節分・12月二の酉に演じられる神楽は、船橋市指定無形民俗文化財である。

意富比神社（船橋大神宮）関係文献目録

著作・論文

- 『下總國舊事考』 清宮秀堅 清宮利右衛門 明治38 ※「巻二 神祇下 意富比神社」「巻十三 神社 意富比神社」 ◇影印本 昭和46 峯書房 ◇『齋房総叢書』一輯一卷に「下總式社考」として収載
- 『明治 神社誌料 上巻』 明治神社誌料編纂所 明治45 ※「千葉縣縣社之部 意富比神社」 ◇復刻本 昭和50 講談社
- 『千葉縣東葛飾郡誌』 千葉縣東葛飾郡教育會 大正12 ※「第二編 第四章 第二節 縣社 意富比神社」
- 『特選神名牒』 内務省 大正14 ※「下總國 葛飾郡 意富比神社」
- 『神祇志料 下巻』 栗田寛 思文閣 昭和2 ※「第十三卷 八 神社 ○下總國十一座 ○葛飾郡二座 意富比神社」 ◇復刻版 昭和46 思文閣
- 『東京市史稿 宗教篇 第一』 東京市 昭和7 ※181ページ 意富比神社 ◇復刻本 昭和48 臨川書店
- 『船橋町誌』 千葉縣東葛飾郡船橋町 昭和12 ※「第二編 第七章 (一) 神社(1)縣社意富比神社」
- 『下總國の御厨と船橋の神明社』 梅田義彦 昭和33 ◎『瑞垣』三六 ◇雄山閣『伊勢神宮の史的研究』に収載
- 『房総の古代—龍談と太鼓の韻—』 是澤恭三 昭和43 ◎『淑徳大学紀要』二号
- 『船橋史談 多(誌)氏について(1)・(2)』 海老名雄二 昭和48 ◎船橋市史談会『(旧)史談会報』45・46号
- 『船橋の民俗—龍談継—』 佐久間象三 船橋市史談会 1971 ◇佐久間象三『郷土史放談』に収載
- 『房総の古社』 菱沼勇等 有峰書店 昭和50 ※「五、下總國の古社 10意富比神社」(梅田義彦執筆)
- 『式内社調査報告 第十一巻 東海道6』 式内社研究會 皇學館大學出版部 昭和51 ※「下總國 10意富比神社」(梅田義彦執筆)
- 『第八回文化財展の報告—龍談龍韻—』 船橋市史談会 昭和55 ◎船橋市史談会『史談会報』三号
- 『意富比神考』 三橋健 昭和56 ◎國學院大學『國學院雜誌』八十二巻一号
- 『式内社の研究 第六巻 関東編』 志賀剛 雄山閣 昭和59 ※「下總國 一座 ○葛飾郡二座 意富比神社」
- 『日本の神々—龍と鯉— 第十一巻 関東』 谷川健一 白水社 1984 ※「下總 意富比神社」(松田章執筆)
- 『関東古社名刹の旅 孫・莊・被囃』 稲葉博 読売新聞社 1986 ※「千葉県 意富比神社」
- 『千葉県神社名鑑』 千葉県神社名鑑刊行委員会 千葉県神社庁 昭和62 ※「東葛飾支部 船橋市 意富比神社」
- 『船橋大神宮社家小仲井家について』 宮本の歴史を作る会 平成3
- 『二つの偽文書からみた夏見御厨と船橋大神宮の社領域について』 高村隆 平成3 ◎『日本大学生産工学部研究報告B(文系)』第24巻第1号
- 『船橋の日本武尊伝説と大神宮の遷座』 長谷川芳夫 平成7 ◎船橋市史談会『史談会報』15号 ◇峯書房出版『船橋地誌 観望して』に「船橋大神宮縁起にみる日本武尊伝説」として収載
- 『船二舟 『延喜式内意富比大神宮』カーズソリスリーブ観望誌』 船橋大神宮絵図作成委員会 京葉新報社 平成11
- 『船橋大神宮の祭神とその変遷』 綿貫啓一 平成11 ※船橋市史談会『史談会報』11号 初出は平成2『千葉文華』25

意富比神社略年表

貞観5年(863)	「下総国意富比神」が正五位下を授けられる(『日本三代実録』)
貞観13年(871)	「下総国意富比神」が正五位上を授けられる(『 " 』)
貞観16年(874)	「下総国意富比神」が従四位下を授けられる(『 " 』)
延長5年(927)	この年に完成した『延喜式』の「神祇」部の下総国十一座中に「意富比神社」とある〔通称「延喜式神名帳・私乱まじみょうちう」〕
保延4年(1138)	伊勢神宮の荘園である「夏見御厨」〔別名船橋御厨〕が成立する
応永4年(1397)	『日尊諡状』(多古町願実寺文書)の本文中に「船橋殿」の文言がある
応永6年(1399)	千葉満胤が「天照大神」に私領を寄進する ※この寄進状を偽文書とする説(福田豊彦『千葉常胤』他)もある
文亀4年(1504)	『白井胤縁判物』に「舟橋天照口」(本文)、「神主富殿」(宛名)とある
永禄3年(1560)	『近藤万栄判物』の本文中に「大神宮」とある
永禄9年(1566)	『豊前守〔河田長親〕制札』の本文中に「舟橋郷内天照大神宮」とある
天正6年(1578)	『高城胤辰判物』に「当年より船橋の郷に於いて神明の御町相立て候」(原擬漢文)とある
" "	『高城胤辰禁制』の宛名に「船橋殿」とある
天正19年(1591)	徳川家康より五十石の土地を寄進される
宝暦5年(1755)	富右近秀胤が『当宮本縁』を著す
天明元年(1781)	意富日皇太神宮、幕府から「権現様御宮其外末社修復」助成の為、廻町天神境内での富饒興行を許可される
天保4年(1833)	意富日皇大神宮、「御宮其外諸末社大破に及び候に付、修復助成の為」(原擬漢文)陸奥国・出羽国・御府内での勧化を許可される
慶応4年(1868)	戊辰戦争の兵火にかかり本殿他を焼失する
明治5年(1872)	県社に列せられる〔船橋市域では唯一〕
明治6年(1873)	本殿が再建される
明治13年(1880)	境内に灯明台が建てられる〔政府公認の民間灯台〕
明治18年(1885)	農具市が始まる〔一時は関東一の規模といわれた〕

『船橋大神宮文書の写本 黒川春村の写本をめぐって』 田村浩 平成13 ◎『千葉県史料研究財団だより』12号

『船橋市域の近世の寺社』 綿貫啓一 平成15 ◎船橋市史談会『史談会報』第23号

『船橋の歴史散歩』 宮原武夫 耑書房出版 2011 ※「原始・古代の船橋」「船橋の宿場町を歩く」

史料・県史・市史

『荏房総叢書 第一輯 第一巻』 荏房総叢書刊行会 昭和34 ※「△古文書 船橋大神宮文書」

『船橋市史 前篇』 船橋市役所 昭和34 ※「船橋意富比皇大神宮 附茂侶神社」(高橋源一郎執筆)

『船橋市史 現代篇 上』 船橋市史編さん委員会 船橋市役所 昭和40 ※「教育・宗教・文化 神社仏閣の沿革 日本の文化に寄与した神社仏閣について 船橋大神宮」他

『船橋市史 史料編一』 船橋市企画部情報管理課 船橋市 昭和58 ※「中世 —— 船橋文書 一二 船橋大神宮文書 (参考) 墨水鈔巻之四 船橋文書」

『船橋市史 史料編五』 船橋市企画部情報管理課 船橋市 昭和58 ※「船橋町誌 第二編 第四章 県社意富比神社」

『船橋市史 原始・古代・中世編』 船橋市史編さん委員会 船橋市 平成3 ※「第六章 第三節 意富比神社」(宮原武夫執筆)

『千葉県の歴史 資料編 中世3 (県内文書2)』 千葉県史料研究財団 千葉県 平成13 ※「第四章 一二 意富比神社(船橋大神宮)文書」

古地誌・紀行文等

『成田名所図会』 中路定俊著 大野政治翻印 有峰書店 昭和48 ※「第三巻 船橋駅 意富日神社 ◎原本は安政5年刊」

『鶴謙 下総名勝図絵』 宮負定雄著 川名登編 国書刊行会 平成2 ※「七 意富日神社」他 ◎原本は嘉永末年ころ成立

『縮 江戸名所図会 6』 市古夏生等 筑摩書房 1997 ※「意富日の神社初め鎮座の地」「意富日の神社」収載 ◎原本は斎藤幸雄等編 天保7年刊

縁起

『習志野市史 第二巻 史料編(Ⅰ)』 習志野市史編集委員会 習志野市役所 昭和61 ※「船橋御殿御由緒書寫」収載

『神道大系 神社編十八 安房・上総・下総・常陸國』 神道大系編集会 平成2 ※「關東一宮兩御神社御由緒略記」「船橋大神宮舊記」「關東一宮 船橋兩社 御由緒略記」収載

『略縁起集成 第一巻』 中野猛 勉誠社 1995 ※「關東一宮 船橋兩御宮 御由緒略記」収載 (船橋市郷土資料館「郷土資料館だより」61号収載とはほぼ同文。資料館だよりは振り仮名省略)

『葛西氏伝承と近世文獻』 葛生雄二 平成8 ◎葛飾区郷土と天文の博物館「博物館研究紀要」4号 ※「八 船橋大神宮 (一) 縁起類の概略」

◎書名、編著者、発行者、刊行年の順。編著者と発行者が同一の場合は発行者を省略。

◎灯明台・奉納相撲・指定文化財に関する文献を除く

◎昭和20年以降の神社案内文献で2ページ未満のものを割愛(『千葉県神社名鑑』を除く)。

(1998.10付 2012.5巻 綿貫)

宿場町船橋

船橋村と船橋宿

「江戸時代の船橋は、陸上交通の要所に位置していたので、宿場として大いに発展をした」。

船橋の歴史について記した本でよく目にする記述であるが、これにはいくつかの注釈・補足が必要である。

その一つは、幕府の定めた船橋村は、日常の生活を共にする村とはかなり異なっていたということである。船橋村というのは、船橋五日市村・船橋九日市村・船橋海神村を合わせた総称だったのである。

二つめは少しややこしい話になるが、船橋村は正式には「船橋宿」と名乗れなかったということである。江戸時代の「宿(しゆく)」は、原則として道中奉行が管轄した所のことで、同じような交通業務をしていても、そのほかの所は継場(つぎ)や継立場といった。船橋村はその継場であったが、慣例として船橋宿と呼ばれることが多かったのである。しかし、公式文書には「船橋宿」と書けないので、弘化元年(1844)には交通業務を円滑に進めるため「船橋宿」と唱えさせて欲しいという訴訟を起こしているが、承認されなかったもようである。

交通の要船橋

前おきが長くなったが、ここでは船橋は広義の宿場であるとして話を進める。

船橋は房総屈指の宿場として繁栄するが、その理由は言うまでもなく当地が、房総三国・常陸東南部から江戸へ向かう街道が集中する、交通の要所に位置しているためであった。千住から小岩・市川を経て来る佐倉道(成田道)が、海神で行徳道と合流し、一方船橋大神宮西下では千葉方面に向かう上総道(房総往還)と分岐している。さらに佐倉道は前原で御成道(東金道)とも分岐している。つまり船橋は、房総の江戸湾岸では最大の街道集中地点だったので、旅行者でにぎわったのである。

旅籠屋(旅館)の数字を見ると、寛政12年(1800)に22軒、文化15年(1818年)に25軒、天保元年(1830)に29軒と増加している。そのほかに幕府公用の上級役人と大名が泊まる本陣も1軒あった。また商家の数も、九日市村だけで60軒近くあったので、初めて江戸に行く者が船橋宿に入って「はや、江戸に着きけるよ」と勘ちがいしたという逸話が伝わっている。

伝馬継立と助郷

宿場というのは単に旅館があるというだけの所ではない。伝馬継立(つばせり)の仕事に従事する者がいて、その御用のための役所(問屋)が置かれた場所でもある。伝馬継立というのは公用の旅行者と荷物を、次の宿場まで無料で運ぶ制度である。伝馬を使役する場合は、前もってその用務・馬数・人足数等を記した証文を江戸の伝馬役所から出し、宿場ではそれに従って人足と馬を用意した。ただし、証文の馬・人足数で足りない時は賃金を払って人馬を雇う。それを御定賃金といって公定の額で、これもあらかじめ数を宿場に通達した。この御定賃金は一般の人馬賃金に比べると低額で、宿場にとってはかなりの負担であった。大名の参勤交代の時は一定数だけ御定賃金で払い、残りは問屋場と交渉して相対賃金を支払った。相対賃金は御定賃金の倍くらいであった。一般の旅行者は伝馬継立とは無縁であり、馬方や駕籠かきと交渉して乗るのが普通であった。『房総三州漫録』という本には船橋の駕籠かきについて「馬方よりも人気悪く甚だ酒代を食らる。乗るべからず。」とあり、相対賃金の実態を物語る。

伝馬継立の業務は、五日市村と九日市村・海神村の二手に分かれて交代で行い、大がかりな時は一緒につとめた。問屋場は五日市・九日市に各1ヶ所あり、五日市は海老川河畔の街道北側(宮本1-22)、九日市は現東魁楼西側(本町4-36)にあった。問屋の業務には公用文書の継立も含まれていた。

なお船橋宿の江戸後期の御定賃金は、次頁表のとおりである。

本町通り周辺の歴史

綿貫啓一

船橋市内の街並みの内最も古い由来を持つのは、西向き地蔵から船橋大神宮西下まで850メートル余り続く本町通りである。しかし、この本町通りも現在見るような街並みに至るまでには、幾多の歴史を経て来ている。

ただし、古くは「本町通り」という名称はなく、昭和15年(1940)の新町名設定で「本町」ができてからのものである。

この通りの始源について『船橋市史前篇』は、通り西入口が屈曲している点と、同所に西向地蔵と呼ばれる古い地蔵堂があって、処刑場だったという伝承もあることから、中世に起源を持つ宿入口と推定しており、それが大方の支持を得てきた。しかし、幕末文久2年(1863)の不動院過去帳の同寺周辺の絵図が、浄勝寺北脇の小道を「往古ヨリ此通將軍家御成道」としている点や、本町通り両脇には中世の痕跡が見当たらないこと等を考慮すると、近世初期の造成とする説(滝口昭二氏等)の方が有力と思われる。

近世(江戸時代)に通りの内で最初に家並が揃ったのは、海老川から大神宮までの五日市村本宿だと想定される。何よりも地名の「本宿」がそのことを物語っている。

江戸前期から中期にかけて(約350~250年前)も、ここが船橋の中心であったとみられる。船橋大神宮門前町としての要素も多少あったのかも知れない。

しかし、本宿は通りの長さが短いので、人口が増加し、当地で宿泊・休憩する者が増加すると、広い場所を有する海老川西側(九日市村)の通りに家が多くなる。

やがて江戸時代中期の途中からは、九日市の中通り辺(巖島神社周辺)に中心地が移る。そして時期は不明だが、旅館業(当時は旅籠屋)は九日市でしか営業できなくなる。つまり、一口に船橋宿といっても、それを構成する五日市・九日市・船橋海神の3村の中で、旅籠の並ぶのは九日市だけで、五日市や船橋海神は茶屋や飯屋でしか旅人相手の商売ができなかったのである。今から200年ほど前の数字を見ると、九日市が旅籠屋22軒(後に29軒に増加)・本陣1軒・商家55軒であったのに対し、五日市は商家38軒であった。

そのように宿場船橋の中心は、江戸時代後期には九日市側に移っていた。当時の宿泊客の多くは、成田山参詣者であったといわれる。そして、少し規模の大きな宿場がいずれもそうであったように、当地の旅籠も多くは飯盛女という名目の遊女を抱えており、歓楽街としての要素も大きかった。

ところが、その旅籠街と船橋大神宮周辺は慶応4年(1868)の戊辰戦争の際に兵火にかかり、一

瞬の内に大半が焼失させられた。五日市側が221軒、九日市側は562軒もが焼失させられてしまったのである。

しかし、その戦災からはいち早く立ち直り、通り周辺はかえって戸数を増していった。明治になっても宿場の機能は変わらず、馬・駕籠に替わって人力車・トテ馬車の往来が頻繁であった。明治前半は宿場としての繁栄が継続した時期だったのである。

その後、明治27年(1894)に鉄道が開通すると、船橋の様相が変わる。成田山参詣客がほとんど汽車を利用するようになって、旅人の宿泊が激減したのである。一時的に船橋は、かなりさびれた状況になったという。ところが、幸運なことに晋志野原の軍隊の増強で軍関係の客が増え、旅籠から転じた割烹旅館や遊女屋は、繁栄を続けていった。

それにもまして、明治後半からの船橋は地方商業都市としての比重を大きくしていった。この宿場から地方商業都市への転換は、地理的条件に恵まれていたせいもあって、ほぼ成功を収めた。その結果本町通りは、永く千葉県を代表する商店街として知られたのである。

話題挿入……。大正時代に至ると街の中心に遊郭がましい場所があるのは好ましくないとする意見が強くなり、県からの指導・達しによって、通りの業者は関東大震災後に廃業し、昭和3年(1928)新たに海神の入会地に新地遊郭が誕生した。……

本町通りに洋風の建物が建ち始めるのは昭和初期からで、銀行がその口火を切った。そして自動車が目につくようになるのもその頃である。

本町通りは太平洋戦争で、空襲の被害を受けなかった。そのため、従来の通りは昭和30年代に入って自動車の通行量が急増すると、歩行者の安全が危惧されるほどになった。そこで昭和35年から42年にかけて、店舗を引いて歩道を大きくとり、建物は中層の耐火建築とする大改造が行われた。この大改造は商店街の新しいモデルとして評判を呼び、全国から視察者が訪れた。

しかし、その後の歴史のテンポは予測を超えて急激であった。船橋の商業地図は、本町通りが生まれ変わって間もない内に大きく変化してしまう。急増した郊外人口の多くが私鉄・バス等で国電船橋に集中し、それを駅周辺に東京等から進出して来た大型店舗が吸収するという図式が変わってしまったのである。その結果、本町通りはかつての商業中心地の座を明け渡さざるを得なかったのである。

そして今、本町通りでは、中層化を拒んで残ったいくつかの明治の建物が、わずかに宿場時代の面影を伝えているものの、平成になってからは中層の建物も多くは高層マンションに建て替えられ、街並みは大きく変貌を遂げてきている。

船橋村御定賃銭

	本馬	半馬	軽尻	人足	街道
行徳まで2里8町	82文	68文	46文	41文	行徳道
八幡まで1里半	58文	46文	37文	29文	佐倉道
馬加まで2里	74文	62文	44文	44文	上総道
横橋まで3里	122文	102文	67文	67文	御成道
大和田まで3里9町	122文	102文	67文	67文	佐倉道
大森まで6里	324文	282文	232文	232文	木下道

※本馬は荷物40貫目まで、半馬は人と荷物20貫目まで、軽尻(かぶり)は人と荷物5貫目まで船橋宿では、人足15人と馬15頭までは公用の通行者に提供したが、それを越えた時は助郷村と称する近隣の村々へ人馬の用を申し渡した。助郷は制度化されたもので、村々ではそれを拒むことはできなかった。しかもこの制度は近隣の村々からすると、いつ人馬を提供するか不定であり、農繁期と重なったりすることもあってたいへんな負担であった。そのため、時代が下ると次第に遠方の村も加助郷、当分助郷という役目を負わされるようになる。しかし、新規に助郷村に組み入れられることは負担の増加となるので、何とかそれをまぬがれようとして、宿場との間で訴訟ざたになることがよくあった。五日市村対高根村、九日市村対西海神村外6村、九日市村対上山新田・藤原新田の例等である。農村にとって助郷の負担は年貢に次ぐものであったから、訴訟を起こしてでもその軽減を願ったのである。時代が下ると人馬は出さずに宿場側に金銭を払って人馬を雇って貰うという傾向になるが、負担であることにはかわりない。

船橋村の助郷村々の古い記録には享保6年(1721)の村明細帳があり、「大助」の村として夏見村・金杉村・後貝塚村・前貝塚村・西海神村・山野村・印内村・寺内村・本郷村・二子村・小栗原村・谷村・久々田村・鷺沼村・田喜野井村・三山村・両飯山満村・高根村・米ヶ崎村・七熊村が記されている。江戸後期の村明細帳では九日市村側の大助郷が夏見村・金杉村・前貝塚村・後貝塚村・行田新田・西海神村・山野村・印内村・本郷村・二子村・小栗原村・古作村・上山新田・藤原新田・北方村、五日市村側の大助郷が七熊村・米ヶ崎村・下飯山満村・上飯山満村・三山村・田喜野井村・谷津村・久々田村・鷺沼村・藤崎村となっている。

船橋の海運業

宿場は人の通行のための機能を主眼に設けられたといえるが、一方で物資の輸送を主にして発達したのが港と河岸である。大きな荷物、重い荷物の輸送は馬の背だけでは限度があり、また宿場ごとに積み替えていたのでは非能率的である。その点船だと馬数十〜数百頭分の荷物を1艘で運ぶことができ、しかも宿場ごとに積み替えるという手間が省ける。

船橋では五日市村の海老川下流東岸に海運業者の家が並び、穀物・薪炭等の輸送に従事していた。元禄15年(1702)にはすでに6軒の業者があり、江戸後期には6〜10軒の業者が営業しており、佐倉藩の年貢米の一部を江戸に輸送していたこともある。この海運業は幕末〜明治前期にはいっそう盛んとなり、一時は40軒もの業者が営業をしていた。なお、九日市村にも少数ではあるが海運業者がいたことを特記しておきたい(魚介類専門の運送とは別)。

船で運ばれるものとしては記録の上では年貢米が多いが、瓜・西瓜・薩摩芋・茄子等を江戸へ売り捌くという記事も見られる。その他に船橋村では肥料である下肥を葛西方面から買い入れていたが、その運搬が総て船で行われていたのはいうまでもない。

船橋市本町通りの歴史に関する文献目録

- 『船橋町誌』 千葉県東葛飾郡船橋町 昭和12
- 『船橋市史 前篇』 船橋市役所 昭和34
- 『船橋市総合開発第1次調査報告書』 財団法人都市計画協会・船橋市総合開発調査委員会 昭和36 ※「
4. 商業の現況と発展方向」
- 『教育行政の発展』 船橋市の産業構造の変化 商業編』 船橋市教育研究所 昭和38
- 『不燃建築 1966年版』 千葉県不燃建築促進協議会 昭和42
- 『市勢概要 昭和43年度版』 船橋市議会事務局 昭和44 ※「防災建築街区造成事業」収載
- 『本町通りの町家』 船橋市本町通り町家調査団 船橋市教育委員会 昭和53
- 『東京周辺都市の変貌と大型店舗の進出—臨海の船—』 松沢光雄 1979 ◇古今書院『地理』第24巻第10号
- 『社会科学習指導資料Ⅱ—臨海の船の発展—』 社会科学習指導資料作成委員会 船橋市教育研究所 昭和
57 ※「Ⅲ 明治以後の船橋宿」
- 『一城を臨む船橋—ふるさとをさぐる—』 船橋市立船橋小学校 昭和58 ※船橋市立船橋小学校創立110周年誌
- 『地域生活環境の現況—コミュニティの発展—』 船橋市企画部企画調整室 昭和58
- 『船橋市史 史料編五』 船橋市史編さん委員会 船橋市 昭和59 ※大正5年『船橋町誌』を収載
- 『本町通りの昔話』 金子幸雄 昭和60 ◇船橋市史談会『史談会報』第7号
- 『臨 船橋遊廓調査レポート—船つり文化の源—』 熊倉安雄 昭和60
- 『街のトレンドを読む』 外益三 日本経済新聞社 昭和61 ※「第三章(1) 近代化路線に揺らく、大宮・
船橋・千葉の中心街」
- 『松井天山 千葉県船橋町鳥瞰図 昭和二年』 解説綿貫啓一 聚海書林 平成元
- 『都市計画・建築行政史』 都市行政史を作成する会 1989
- 『船橋旧市街地の微地形発達と歴史—臨海の船—』 長谷川芳夫 平成元 ◇船橋市史談会『史談会報』第11
号
- 『市内の古街道を行く』 綿貫啓一 平成元 ◇船橋市史談会『史談会報』第11号
- 『駅で見る臨2 九日市』 船橋市郷土資料館 平成4
- 『船橋繁華街形成史—臨海の船を語る—』 天下井恵 船橋歴史情報ネットワーク 1996
- 『旧上総道を行く』 滝口昭二 宮本公民館 平成8 ※昭和8年臨海三郡を歩く4期
- 『船橋市史 近世編』 船橋市史編さん委員会 船橋市 平成10 ※「第三章 宿場町船橋の変遷」
- 『千葉県の歴史 臨 地誌2 (地域誌)』 千葉県史料研究財団 千葉県 平成11 ※「第2章第2節4
船橋市」
- 『入門臨 臨海三郡 宿場町船橋の沿革』 綿貫啓一 平成13 ◇船橋市史談会『史談会報』第21号
- 『集落・町並—千代田・町並の発展—』 千葉県立総南博物館 千葉県教育委員会 平成14
- 『中世の船橋—臨・臨・たがね—』 船橋市郷土資料館 2002
- 『船橋地誌 現況をたずねて』 長谷川芳夫 斎書房出版 2005
- 『目で見る 船橋の100年』 監修滝口昭二 郷土史出版社 2007
- 『わがまち たてもの自慢』 千葉県北西部地区文化財行政担当者連絡協議会 平成21 ※「ふなばし本町
通り再発見—中世から現代まで—」(道上文)を収載
- 『船橋の歴史散歩』 宮原武夫 斎書房出版 2011 ※第二部一「船橋の宿場町を歩く」

◎書名・論文名、編著者、発行所、発行年の順である。編著者と発行所が同一の場合は発行所を省略。

(2006.1版 2011.2版 綿貫)